

# RelBib

Bibliography of the Study of Religion

<https://relbib.de>

Dear reader,

This is a self-archived version of the following article:

---

Author: Dehn, Ulrich  
Title: "Hito no monogatari o sagashimotomete: Auf der Suche nach Geschichten von Menschen"  
Published in: Fukuin to sekai (Evangelium und Welt).  
Tōkyō: Shinkyō Shuppansha; 東京: 新教出版社  
Volume: 44 (1)  
Year: 1989  
Pages: 21 – 31

---

The article is used with permission of [新教出版社](#).

Thank you for supporting Green Open Access.

Your RelBib team

EBERHARD KARLS  
UNIVERSITÄT  
TÜBINGEN



UNIVERSITÄTSBIBLIOTHEK

# 人の物語を探し求めて

——日本における世の神学？

ウルリッヒ・デーレン

その起源を太陽にもつ国——日本はとりわけ「禅の国」として一般に知られている。禅宗のもともとの故郷は中国である。紀元五世紀に、菩提達磨によってインドからもたらされた仏教の伝承は、中国独特の特徴を刻みこまれた後、朝鮮を経て日本に達したのである。

このような歴史的経緯にもかかわらず、今日日本は、禅宗の二大宗派すなわち臨済宗、曹洞宗を擁するところの禅宗のメッカと見なされている。これら宗派は、禅という領域において、理論的（かつ、ないしは）実践的に、日本の宗教性の多様な諸特質に対して根本的な取組みをしようとしているのである。

禅宗に加え、さらに日本に起源する仏教宗派、すなわち浄土について（真の）教え——浄土宗、浄土真宗——、また仏經典にその拠り所をもとめる新宗教（これら新宗教は、第二、第三世代を経る間に、「新々宗教」によって凌駕されたのであるが）まで含めた日蓮宗から派生した諸宗派が存在する。これらの中で最も影響力のあ

る、また最大の宗派として、創価学会（一九三〇年設立）と立正佼正会（一九三八年設立）を挙げることができる。

これら宗派はすべて、古来からの日本のアニミズム的・シャーマニズムの神道に肯定的な態度を示してきた。日本の古神道は、仏教の伝統と手を組んで、ある時にはこれと習合して、この国の文化、社会慣習、人々の生活全般に根本的な特徴を与えてきたのである。急速な近代化と、数え切れないほど多くの西欧の文化遺産の偏向的な輸入もまた、今日に至るまで、本来の日本的なものを堅持するという壁にいささかの傷を与えることもできなかった。

自然、社会、また政治に対する人間の関わりについて、このように全く独自の宗教的表現形式をもつこの国で、キリスト教神学と教会とはどのような様相を呈するのであるか。

これまでの一般的な説明から特定の問題領域へと問題を掘り下げてみよう。日本は、単に諸々の深い宗教的・文化的伝統をもつ国だ



とは断じて言えない。他方で、日本の産業社会と高度独占資本主義は、日々新しく、不義と非人間性の犠牲を要求している。高度工業諸国中で最長の労働時間、失業の増大、女性に対する不利な条件の強要と差別、外国人敵視、「新たな貧困」の拡大、新たに芽生えつつある軍国主義、国家主義、軍備拡張——これらは、多くの問題の内のほんの一部を示しているに過ぎない。日本のキリスト者は、この環境世界のどこに見い出されるのであろうか。教会は、これらの問題と、神学的にどう関わっているのだろうか。エキュメニカルな言葉を用いるなら、日本における神学と教会の歴史的現実化(Kon-textualisierung)は、どのような仕方、表現されてきたのであろうか。

### 社会の中の日本の教会

日本キリスト教団(以下「教団」)総幹事嶋正昭氏は、一九八八年のイースターのメッセージの中で、次のように記している。「神は、わたしたちが、考えを同じくする人とだけ交わりを持ち、救いの恵みを受けて、自らを教会という壁の中に閉込めることを期待してはおられない。門の外では(ヘブル人への手紙一三・一二—一三参照)、歴史の流れが速やかに激みなく進行している。わたしたちの好むと好まざるところにかかわらず、ポンテオ・ピラトの強力な権威は、わたしたちの周りいたるところで渦巻いている。イエスは、このような力と権威の真直中で血を流し、苦しみを受けられた。願わくは、わたしたちもまた、"ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受

ける"者とならんことを、そのことによつて、わたしたちもまた復活の恵みを体験できるように!"(1)教団は、教会の門から踏み出し、ポンテオ・ピラトの力に敢然と立ち向かおうとしたここ二〇年以上の労苦の歴史を回顧することができたのである。

戦争責任という課題に真向から取り組んだ長い段階を経て、日本最大のプロテスタント教会は、既にその前年決議した社会活動基本方針を受けて、一九六七年、当時の総会議長鈴木正久のもとで次のように公式に表明した。「……わたしたちの愛する祖国は、今日多くの問題をはらむ世界の中であつて、ふたたび憂慮すべき方向に向かつていることを恐れます。この時点においてわたくしどもは、教団がふたたびそのあやまちをくり返すことなく、日本と世界に負っている使命を正しく果たすことができるように、主の助けと導きを祈り求めつつ、明日にむかつての決意を表明するものであります」。太平洋戦争と日本の全体主義下での教団の国家への忠誠との対比において、ここでは、政治的「見張り」としての使命が強調されている。「"世の光"、"地の塩"である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。……しかるにわたくしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかつて声明いたしました……」。

次に続くのが、六〇年代終わりの政治的嵐である。この嵐は、教会をも手付かずのままにしておかなかつた。一九七〇年の大阪万国博覧会に、キリスト教が独自のパビリオンをもって参加するか否かをめぐつて激論が戦わされた。教団は、自らと国家との関係をより

根本的に考え抜くより他なかった。それに加え、教団の中樞機構

(常議員会、総会)を発端とする社会的・経済的な衝撃が、実際、諸教会によってどの程度まで強く受け止められたかを、教団は再点検せざるをえなかった。一九八二年には、以下のことが確認されなければならなかった。すなわち、教会の少数部分と、数の点ではごく少数のグループが、社会的な自発性と神学的思考の方向転換に到達しているだけで、依然として全般的には、「教会」と「この世」との分離(2)ということが、諸教区の自己理解において重大な役割を果たしている、ということである。常議員会は、次のような記録を残している。「ある神学が、国家と社会を手こずらせる問題に関われないならば、その時、その神学は神学としての存在資格を失う。神学的思考は、絶えず具体的問題をまともに受け止めねばならない。神学的思考には、常に、信仰に基づいた新たな実践が伴う(3)。しかしながら、具体的な教会生活においては、通常、数の上での拡張が、社会的関与よりも優先されていると言っている。

教団と日本キリスト教協議会(NCCJ)の中樞機構では、エキニメニカルな方向づけと社会活動への要求が、韓国、フィリピン、台湾とのつながりの制度化の中に、また靖国神社問題、部落差別・アイヌ差別、平和問題などに取り組む諸委員会の設置の中に、具体的に現われている。最大の関心と、もっとも広範な具体的関わりは、過去においても、また現在においても「靖国問題」と天皇制に集中している。

明治以後、戦争の英雄を祀る神社として知られる靖国神社(一八

六九年創建)を国営化しようとする試みが、一九六九年以来、くりかえし企てられてきた。強い影響力をもつ戦没者遺族の連合組織(日本遺族会)や、天皇制を志向するいくつかの右翼の集団が、こうした試みの後押しをしている。彼らは、政権を掌握する自民党派の中に、院外圧力団体を作ることができたのである。一九八二年および一九八五年八月一日(日本の敗戦記念日)には、当時の首相(鈴木、中曽根)と何人かの閣僚の靖国神社への参拝が行なわれた。一九八六年、一九八七年の閣僚の参拝に続き、一九八八年もまた一人の大臣の靖国参拝がくりかえされた。その度に国内外の激しい抗議にさらされつつ、閣僚の靖国参拝は、日本帝国主義の象徴への歩みを開始したのである。靖国神社を国家の監督下に置くことは、当然のことながら、強化されつつある日本のナショナルリズムと、軍備拡張の企てのためのイデオロギイ的基礎づけと見做し得るであろう——たとえ、新たな日本軍国主義の政治的根拠が、天皇制の中に、ないし国家神道による英霊崇拜の中に求められるというよりは、むしろアメリカの軍事的世界戦略という側からの圧力の中に、また春風を感じとった院外軍備拡張論者たちの要求のなかに求められるとしても。

教会の反靖国運動のひとつの結晶は、ここ一五年來の中谷康子さんの訴訟である(4)。

中谷さんの夫は、「自衛隊」に服務していた一九六八年、交通事故で亡くなったが、一九七二年、靖国神社の地方分祀である山口護国神社に、自衛隊隊友会によって合祀された。中谷さんは、一九七

三年一月以来、彼女の夫の合祀を法的に取り消すよう求めているのである。キリスト者である中谷さんにとっては、彼女の夫が神道の神という枠の中での「カミ」として神社に祀られていると考えるだけでも、とても耐えられないことであった。しかしながら彼女は、一九八八年六月一日、最高裁の最終審で敗れた。判決の主旨は以下の通りであった。隊友会（国ではない！）の発意による合祀は、憲法の政教分離の原則に違反しないし、またその限りにおいて彼女の信教の自由を犯すものではない、と。

中谷さん自身、反靖国運動の列に加わってきたが、他方で、彼女の訴訟の経過を見守り彼女を支援する国民的広がりをもった連帯グループが生まれた。

かなり以前から教会がその課題として注意を向けてきたもう一つの問題領域は、外国人登録法、とりわけ入国管理局への登録に際しての強制的指紋押捺である。

日本は、外国人に指紋押捺を要求する（アメリカ、韓国を含む）二四カ国の内の一つであり、またごく最近まで定期的な押捺の繰り返しを定めていた唯一の国であった。この外国人登録法が、一九八八年六月一日から一段と厳しくされ、爾来教会以外のまた教会関係の様々なグループによる強い反対にぶつかっている。この法律は、当局側も認めるように(5)、在日韓国・朝鮮人に向けられたものである。彼らは、日本の植民地時代に、安価な労働力として日本に強制移住させられ、今日では、名前を日本人名にするというハードルを乗り越え、進んで「帰化」させられることを甘受しないうちは、

望ましくない異物としての扱いを受けている人々である。

もちろんとうの昔から、韓国・朝鮮以外の多くのアジアの国の、より一般的には「第三世界」の国の国籍をもつ人々は、外国人登録法によって押し進められている抑圧と差別の犠牲となってきた。合法ないし不法入国した外国人労働者たちは（その大多数はフィリピン人であるが）、法外な仲介保証金を支払ったり、賃金をピンハネされたりしている。極端に解決困難な問題を挙げるなら、彼ら外国人労働者が、ヤクザと組んでいる業者の術中に陥った場合である。職を求めて不法入国した東南アジアの人は、約五万人に上ると推定されている(6)。一九八七年五月一七日、カラバオ会が誕生した。

この会は、寿日雇労働者労働組合から生まれた、横浜寿町の、特にフィリピン人出稼ぎ労働者のための自立組織連合と連帯グループである。キリスト者もこの会に参加している(7)。

ここで、諸々の活動の性格について、手短かな批判的省察を行なうことをお許し戴きたい。

(一) 靖国神社国営化に対する、天皇制総体に対する闘いは、中谷裁判の最終判決によって、また天皇裕仁の病臥によって、ひとつの重大な局面に達している。首相と閣僚の靖国参拝は、その都度国内外の激しい批判にさらされ、一九八五年以後、数の点では減少している(8)。靖国参拝に対する世間一般の注目と批判が募り、右翼急進グループは、おおよそ過半数だけで国営化を押し通そうという試みには成功しなかった。果たして靖国神社国営化は、現時点で政治的に成立する公算が大きいと見なされるか否かを、私は問いた

い。また仮に成立したとして、国営化が、果たして日本の再軍国主義化の決定的な増強剤として効果を發揮するかどうかを、私は問題にしたい。政治的・軍事経済的な根拠が具体的に指摘されねばならない。これとの関連で高い人気を得ている「反共」が、天皇制日本において積極的に受け入れられているのも、しごく当然なことである。しかし、天皇制に対する闘いの価値が、そのようなものとして（「反共」に対する闘いとして）問われるべきではない。問題となっているのは、教会の社会的使命が総体的脈絡においてもっている意味についてであり、またこの運動が、根本から社会的正義に違反し右傾化している社会の核心をいかに正確に撃ち抜くか、ということである。靖国国営化というすぐれて象徴性を帯びた問題に対する闘いが、人間の尊厳の擄取・否定が沈積している日本社会の抱えるその他諸々の問題の解決に本来注がれるはずの大切なエネルギーを、奪っているのではないかと懸念する(9)。

(二) 外国人登録法と、反感を買っている指紋押捺条項は、宣教師たちの間でも、彼ら自身これに該当するために注目されるところとなった。その際、指紋押捺の繰り返し義務が、通常、意義申立ての対象であった。指紋押捺拒否者は、特に韓国・朝鮮人がよく知られているが、ある場合には拘留されるなどの抑圧を加えられた。支援グループの活動は活発である(10)。けれども、指紋押捺と、指紋押捺が連想させる犯罪者扱いの不当性とに注目が集まったために、外国人登録法がもっている他の抑圧的側面が、しばしば看過されているように思われる。指紋押捺という、またしてもすぐれて象徴性を

帯びた問題の背後で、特にアジア人移住者あるいは在日韓国・朝鮮人に対する現実的な経済的・社会的抑圧というもう一つ別の視点が度外視されているように思われるのである。

このわずかな、また決して十全とはいえない概観によってお伝えしようとした私のおぼろげな知識とは次のことであった。すなわち、この場合とくに日本キリスト教団という枠内で社会倫理的諸活動がもっている視点についての知識であり、また社会問題に関する差し迫った問題意識が教団内部でいかに高まっているかについての知識である。職域伝道の展開は、残念ながら十分に進捗してはいない。また「女性問題」への取組みも緒にたばかりである。教団もまた、自発的に行動するグループは教の上では少数であると、既に自己批判的に認めている。けれども、様々な場所での、エキニメニカルなグループあるいはキリスト者非キリスト者連帯グループの成立によって、教会は、しばしば引き合いに出される自分の影を踏み越えるようになった。例えば、菊地牧師を中心とする山谷での運動、渡辺牧師が関与するカラバオ会の活動などがそれである。

### 新しい神学の道？

出発点の問いに戻ろう。日本の教会と神学は、他の諸宗教がその宗教独特の日本的刻印を刻みつけてきたと同じように、教会を取り巻く社会の諸問題に対処する、自らの、借物ではない神学的道具を開発してきたのだろうか？

方で、  
多くのアジアの国々には、一 教会構造的にも神学的にも、

西欧的伝統による干渉から自由にならうという要求が、他方で社会的、政治的諸問題という圧迫が存在する。こうした要求と圧迫とが、その時々固有の社会状況への強力な神学的切り込みへと、固有のコンテキストを神学的に発見させることへと導くのである。

フィリピン人司祭エディンオ・デ・ラ・トーレは、一九七四年次のように記している。「経済学の言葉を学んだ時、私は当時のフィリピン神学を一つの従属的企業として理解するようになった。この企業は、西欧（より正確には南・北ヨーロッパ）からの完成品の輸入競争をしている神学者＝商人、知的「買弁」によって支配されている。彼らは、それを再包装し、この国で売り捌いているのである。この支配的分業体制下にあつては、神学的調査と生産は外国でなされねばならなかつたし、フィリピンでのわれわれの課題は、その「牧会的適用」であつた。……何人かの友人が、かつてマニラの下町のとあるチャペルのそばを通つた。チャペルの塔には、「キリストが答えた！」という宣言が、肉厚の文字で掲げられていた。さらに下の方を見ると、けばけばしい赤ペンキを塗りつけたお決まりの活動家のスローガンがあつた。しかし、それとは別のあるものが、彼らの注意を引き（想像力をかきたてた）。黒のペンテル・ペンドで記された小さな文字——それは、「問いは何か？」と読めた。答えや完成品を躍起になつて手に入れようとしている人にとって、この挿話は、健全な忠告だと思ふ。もし私が、真のフィリピン人神学を欲するとすれば、私は先ず最初に、フィリピン人の問いに鋭敏であるべきだ」(11)。

日本人神学者小山晃佑氏は、宣教師としてタイにいた時、米作地帯を通り水牛の間を通り抜けて、米作農民の小さな教会に行く道すがら、次のような考えを持つに至つた。自分は、この農民たちに向かつて、トマス・アクィナスやカール・バルトの教えを説くことはできない、と。「北部タイでの私の神学は、農民たちの諸要求から始められねばならない。『神学大全』や『教会教義学』といった大思想から始められてはならない」。ここでの説教には、鬮鶏、ねばねばの米、雨漏りのする屋根、雨季などの言葉だけが存在するはずである。そうでなければ、説教は農民たちの耳には届かないであろう(12)。

インド人サムエル・ラヤンは次のように感じ取っている。抽象的な神イエスは、インド国民の中の生きのびるために闘っている大衆からは遠い存在である。これに対して、福音書の間イエスが、いと近くにいます救いの存在でありうる。「イエスの人性は、概念ではなく、『現実の人の生』である。イエスは、人間的制約のある精神の持ち主であつた。その精神は、文化的に条件づけられた相対的なものであつた。イエスが用いた表象や言葉は、一世紀の植民地パレスチナにおけるユダヤ教という枠の中の彼の小さな世界で、彼が自由に駆使していたものである。イエスは全知ではない。彼は、未来の事柄を知ることではできなかった」(13)。人間イエスに関するこのラディカルな位置づけは、伝統的な神学理解には挑発的に響く。またこの位置づけは、イエスの文脈化について語ろうとする試みであるばかりでなく、福音書で語られている事柄についての新

しい、非抽象的理解に本気で取り組もうとする試み以外の何物でもない。このイネスが、インドの土地なしの労働者に到達する。彼は、椰子の葉で葺かれた粘土造りの小屋で彼らが習った言語によって、彼らに語りかけるのである。

アジアの全キリスト者から発せられる彼ら独自の声から判断できる限りで言えば、彼らはそれぞれに、彼ら固有の仕方で、社会的ないし文化的（小山晃佑）挑戦と神学的省察との間の橋渡しをしているのである。私たちは、このアジアの神学的見本という「試食サンプル」に手をつけることなく、それに触発され、それではいっいたい日本は、いかなる仕方で自らを表現するのを探求しなければならぬ。日出ずる国（小山氏の故国）は、——二年の滞在を経た、日本人ではないこの私の印象ではあるが——依然として神学的「買弁」の状態にあるように思われる。一方に、数多くのキリスト教的社会的倫理に動機づけられた諸活動が存在する。しかし他方に、圧倒的に西欧的思考モデルに方向づけられた、また倫理と教義との峻別を持ち運んでいる神学の営みが存在する。この両者の間の懸隔は大きい。前述の例のようなアジアの文脈の神学を背景にして、日本探訪に出かける人は、たちまち失望する。

このこととの関連において、私たちは、繰り返し引き合いに出される名前に遭遇する。すなわち北森嘉蔵、滝沢克巳、八木誠一、また場合によっては賀川豊彦、内村鑑三の名前である。日本の文化・宗教哲学と、キリスト教神学との間の対話を成立させようという、特に最初の三人の試みは、日本における以上に海外で、ドイツでも

また、かなりの注目を集めた<sup>(14)</sup>。彼らに共通していることは、社会的次元の完全なフェードアウトであり、また（これはこの数年来、北森氏にもあてはまることであるが）日本仏教との対話への傾注である。したがって、日本の社会・経済的「文脈」を挑戦として受け止める独自の神学は、現在に至るまで表面に現われてはいないし、いわんや海外で紹介されたり受容されたりはしていない。

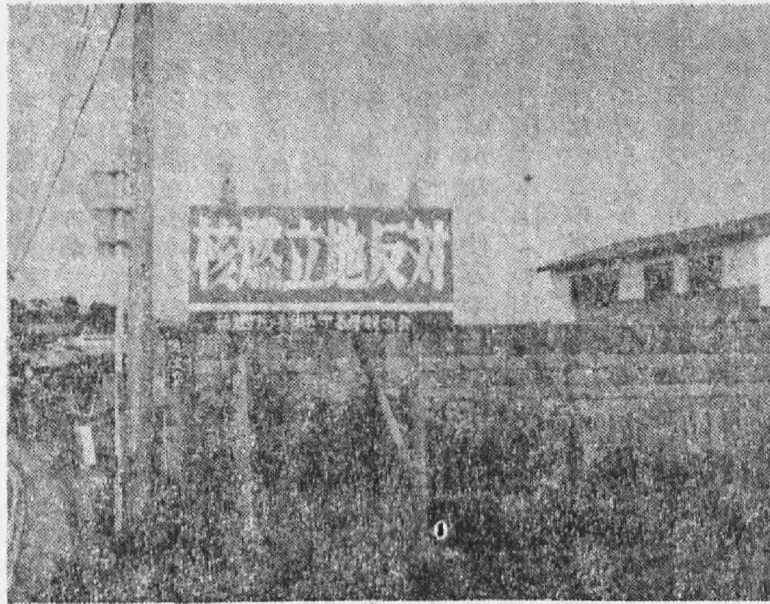
日本人神学者たちは、西欧において、少なくとも、ドイツあるいはアメリカの神学との対決の中で、彼らの「遍歴時代」を勤めあげ、かの地の思考構造をも熟知している。西欧神学の摂取は「日本的」に行なわれる。それは疑いもなく、一つの生産的な消化であり、また現在化ではある。しかし、部外者である私の印象では、それ以上に出ることはない。神学的に西側の人は、社会的現実とその分析を、神学の思索と行為（“doing theology”）の対象とみなすことを、ずっと以前から苦手としてきた。日本は、経済的・技術的な面で、ヨーロッパやアメリカを指向しているが、それとまさに同じように、日本は神学の面でも、日本がアジア的であるという理由を何ひとつ認めてはいない。もつとも、自らの神学的営為へのフィードバックなしの受動的文書閲読でこと足れりとするなら話は別であるが。

したがって、もしこのような探求が成果のないむなしものに止まるとするならば、日本の社会的現場を神学的に受け止めるための糸口は、どこに呈示されるのであろうか。ポントテオ・ピラトの支配下にあつて、キリスト者の赴くところはどこなのか。社会的戦場（中

嶋氏)か? そしてそこでの体験を、十字架の下での省察へと持ち込むのか。

### 人の物語

日本の言語感覚の重要な要素の一つは、「物語」である。物語は、人間の運命を叙述するという体裁をとることができる。「物語」は通常、悲劇的な、得体の知れない、(憶測された)不可避的筋立て



をもっている指摘され、またそのように考えられている。古典的叙事詩が「源氏物語」の文体において表現されうるし、また人間関係のからみ合いのなかで挫折したり、社会という石うすのなかで擦りへらされている一人の人の現代的運命も、物語によって意味されうる。最近私は、二つの異なる経験の極がどのよう

に関係するのかを発見し、また「物語」を私なりに納得することができた。その「物語」とは、裕福で、高度に産業化された日本のイメージに全くそぐわない人間の運命である。この運命のキーワードは、「出稼ぎ」、経済の誤った方向への発展、農村離脱である。

私のこれに関する経験の第一の極は、東京の日雇い労働者地域、山谷である。(山谷という地名は数年前からはや存在しない。しかし「山谷」は、依然として、一社会現象の象徴である。)日本のあらゆる地方(とくに農村)から、かつてはきちんとした職を求めて出てきた約八千人の男たちが、日雇い労働で生活している。彼らの多くは、まったく法外に高い共同宿舎に寝泊りしている。しかし何百人かは、夜も路上にいつづける。彼らの多くは、農村で経済的に生きのびることが不可能となったために、その家族を残し、定期的に家に送金する約束をして、首都へと出て来たのである。ある者は、その約束を果たすことができる。しかしある者は、かろうじて露命をつないでおり、酒の力を借りて、楽しい夢を追い求めようとしている。毎朝六時頃から、決められた場所で、「手配師」すなわち契約仲介人による日雇い労働の割当てが行なわれる。幸運な者は仕事にありつき、たとえばマイクロバスで道路建設現場に向かう。仕事にあづかれた者は、路上で眠るか、労働から「解放された」他の者たちといっしょに、酒を持ちよったりして路上で過ごすのである。

「山谷」は、四つあるこの種の人口集中地域(「寄せ場」)の一つである。他の三つは横浜、名古屋、大阪にある。

もう一方の悲劇の極に私が接したのは、本州の最北端青森県にお

いてであった。青森県は、沖縄群島に次ぐ、日本で最も貧しい地域——県民総生産が最も低く、また失業率が最も高い過疎の県である。青森県東部下北半島では、畜産、米作、そして特に漁業が主要な生計源である。西の津軽は、りんごの生産で有名である。りんごの最盛期が終わる晩秋以降半年間は、津軽の多くの農民にとって、「出稼ぎ」以外の道は残されていない。冬が到来するやいなや、そうでなくても天候不順で（今年もそうであったが）米の作柄が悪いときには、県東部陸奥湾周辺の多くの漁民や米作農民も、同じような境遇に置かれるのである。そのために、この地域では（ここ数年）、一人で子育てする母親、職業に従事している母親の子どもたちのための託児所と保育園が繁盛している。青森の経済的開発を企図する政府の試みは、失敗に終わっている。一番最近の試みが、下北・六ヶ所村への核燃料サイクル施設の立地計画である。一九八四年以来絶えざる拡大を続けている市民運動は、政府に対し、次のことを明確に予告してきた。すなわち、核燃料サイクルは、青森の雇用問題を解決するどころか、むしろ新たな、予測のつかない重大問題を生み出すであろう、と。例えば、六ヶ所村からの強い北東の風は、津軽のりんご産業全体を危機にさらしうるであろう。しかしこれも、核燃料サイクルがもたらす多くの影響の中のほんの一例に過ぎない。しかし政府は、父親が戻って来れるような職場が欲しいという貧しい青森県民の切実な要求を理由にしている。小・中学校の生徒たちは、作文で、彼らの希望を次のように言い表わしている。お父さんが、小さなお土産を持って、少なくともお盆かお正月に

は、東京から家に帰ってくるように。お父さんと一緒に旅行がしたい(15)、と。

市民運動と教会の抵抗運動の結接点に立っているのが、八戸の教団牧師・岩田雅一氏である。彼は、状況からの挑戦を、彼自身への、彼の教会の働きへの、また彼の神学への挑戦として受け止め、六ヶ所の核燃料サイクルに反対する闘いを、教団の社会倫理的課題の一つとすることを、自分の課題としたのである(16)。

青森の貧窮化の悲しむべき帰結は「出稼ぎ」である。人の運命——国の名前さえ記されていないかったなら、同様の文面で、インド、フィリピン、タイ、あるいはバングラディシュから、この物語は報告されるであろう。

ここに、社会的現実の神学 (Theologie der gesellschaftlichen Wirklichkeit)、現場(Orte)の神学のための素材がある。核燃料サイクル施設という被造物を脅かす建造物に抵抗して闘っている人、生きのびる可能性を探し求めて挫折し、社会の周縁に入り込んだ人——この神学は、こうした人の物語、人間の運命を主題とする神学なのである。

聖書は、その経過の中に神の計り知れない御心と導きを読みとれるような、人間の運命を豊かに叙述している。旧約聖書の中の「出稼ぎ」についての有名な例として、創世記四六章以下が、私たちに伝えられている。それは、ヤコブとその息子たちの、カナンからエジプトへの移住の物語である。彼らは、カナンではもはや食べてゆけなくなり、エジプトに移住する。そこでの裕福な暮らし、そして

抑圧、そしてモーセとアロンに率いられての解放がそれに続く。エジプト的抑圧者の中の代表的人物を打ち殺した後、モーセ自らは、エジプト人による迫害を恐れて、ミディアンの地に身を引く(出エジプト記二・一一以下)。マリヤとヨセフは、幼児を皆殺しにするヘロデを避け、エジプトに逃走する(マタイ福音書二・一三以下)。また警え話においても、遠くに幸運を求めたところが、そこで挫折し父親のもとに戻ってくる若者の物語を私たちは見出すのである(ルカ福音書一五・一一以下)。ここでは、「脱出」というキーワードに包括されるほんの数例を挙げたに過ぎない。これら聖書の「物語」と、日本の出稼ぎ労働者、下北の漁師、山谷の日雇い労働者の生の物語との結びつきは、どのように見えるのであろうか。

この小論における私の課題は、日本の教会向けの「文脈の神学」(Kontextuelle Theologie)を開発し、これを提起するつもりはない。私は、日本キリスト教団の社会倫理的状況を総括的に再述し、マジアの文脈の神学のもっている衝撃を背景にした、日本の社会的現実の明確な「現場」を、新しく考察しようとするつもりである。それは私にとって、ひとつの神学的「経験の橋」にもなったのである。「日本の現場の神学」(Theologie des gesellschaftlichen Ortes in Japan)というタイトルをもつ、富坂キリスト教センターの研究プロジェクトは、今日の日本社会における「人の物語」を背景として、神学の営みの新たな道を求めることに尽力している。この道は、特殊日本的なものとならう。しかし同時に、他のマジアの国々のキリスト者(そして非キリスト者!)から学ぶことを避けては通

れないであらう。

(富坂キリスト教センター協力主事)

註

- (1) Kyodan Newsletter (キリダンニュースレター) No. 223, 20. 3. 1988, 1.
- (2) 日本の教会が、日本の社会の中の教会以外の部分に対して、自分の周りをぐるりと引いている境界を示すための、好んで用いられる語呂合せ——境界—教会——を参照せよ。
- (3) Soziale Aktivität als wesentliche Aufgabe der Verkündigung, Beschluß des Exekutivausschusses des Kyodan von November 1982, in: Terazono/Hamer 151-154, 152.
- (4) KNL No. 226, 20. 6. 1988; NAKAYA Yasuko: Meirre Entscheidung, Terazono/Hamer 75-80; YODA Yasuko Die Verantwortung der Frauen für den Krieg und der Nakaya-Prozeß, aO. 80-87; M. Schulz: Die japanische Friedensbewegung und das Yasukunischreinproblem, EMS Informationsbrief 6. 88. 参照せよ。
- (5) The Japan Times 25. 10. 1986: "Fingerprinting Is Psychological Problem: Official" 40. 12. CCA-URM/WCC-PCR: Alien Fingerprints. Legacies of Japan's war, Hong Kong Dec. 1986; CCA-URM: Asian Issues, Vol. 2/No. 8, Mar. 1986; Japan: Will History Repeat Itself? 参照せよ。

- (6) 登録されたアジアからの移住者の総数は、一九八六年二月現在で、百一万人以上のほむ (AMPO Vol. 19 No. 4, Tokyo 1988, 13)。
- (7) KNL No. 225, 20. 5. 1988; カラバオ会刊の、定期・新聞切抜き情報サービス誌『外国人出稼ぎ労働者』; AMPO Vol. 19 No. 4: Japan's Human Imports. それぞれ参照せよ。
- (8) 竹下首相は、首相就任直前の一九八七年一〇月、次のように言明した。政府の靖国神社公式参拝が、もはや不快に思われないような政治的風土を醸成したいと。結局、一九八八年八月一五日の参拝は、自ら断念した。
- (9) 同様に、M. Schulz aO. 6. を見よ。富坂キリスト教センターでは、ここ数年来、キリスト教と天皇制の関係についての研究が行なわれている。
- (10) 特徴的なことだが、CCA-Heft Asian Issue Vol. 2 No. 8 (Mar. 1986) は、まさに靖国神社、外国人登録法(指紋捺捺に重点をおいて)、そして再軍国主義化にページを割いている。
- (11) E. de la Torre: Touching Ground, Taking Root. Theological and Political Reflections on the Philippine Struggle, Quezon City 1986, 5.
- (12) 既に古典的となった彼の名著 "Waterbuffalo Theology", New York 1974 (4th ed. 1986) の序言、その他箇所を見よ。
- (13) S. Rayan: This Man Jesus, Jeevadhara 92, Mar. 1986, 149ff. 155, 161、参照せよ。
- (14) 特にならば C. Michalson: Japanische Theologie der Gegenwart, Gütersloh 1962; K. Ogawa: Die Aufgabe der neueren evangelischen Theologie in Japan, Basel 1965; B. Oitz-Oguro: Analyse und Auseinandersetzung mit der Theologie des Schmerzes Gottes von K. Kitamori, Frankfurt/Main 1980; Theo Sundermeier: Das Kreuz als Befreiung, München 1985 (=Keiser Traktate 89); S. Frisch-Oppermann: Eine Reise in den Widerspruch — oder eine typisch japanische Theologie, Ökumenische Rundschau Jg. 37, 1988/3. をそれぞれ参照せよ。日本サイドでの北森との対論については、鈴木正三「キリスト教と大嘗祭」(富坂キリスト教センター編『キリスト教と大嘗祭』東京、一九八七年、二九九—三三三頁、とくに三〇〇—三〇六頁を見よ。
- (15) 六ヶ所村編『つくし——出稼ぎ文集』一九八七年一〇月 (出稼ぎ労働をテーマにした小・中学生の作文集。その大半は、自分の父親宛での架空の手紙という体裁をとっている)
- (16) 『福音と世界』一九八六年一二月号、一九八八年六月号所載の岩田雅一氏の寄稿論文、および同誌一九八八年一月号の座談会記録を参照せよ。(訳||笠原 義久)